

令和5年度 厚木市障害者協議会 第3回 一貫した子育て・療育支援プロジェクト

日 時	令和6年2月1日（木）午後2時～午後4時
場 所	アミューあつぎ ミュージックルーム2
出席者	厚木市障がい福祉課、厚木市健康づくり課、厚木市教育委員会、厚木市子ども育成課、厚木児童相談所、厚木保健福祉事務所保健福祉課、座間支援学校、訪問看護ステーションもみじ、特定非営利活動法人厚木なのはな、社会医療法人社団三思会 多機能型事業所 にじいろ、やまびこ会（厚木市自閉症児者親の会）、厚木市社会福祉協議会、オブザーバー；一般社団法人クロスオーバー大和 事務局：厚木市障がい福祉課、厚木市障がい者基幹相談支センター
1 開会	配布資料確認
2 議題	<p>(1) 支援が必要な子どものためのサービスマップについて</p> <p>前回10月のプロジェクトで配布し、意見をいただいたものを反映し、完成したものになります。1月より市役所のホームページで閲覧できるようになっております。今後、それぞれの機関でどのように活用できますでしょうか。</p> <p>厚木市障がい福祉課…窓口において、対象の方が来られた際は手に取れるようにしたい。 なるべく多くの方に周知したい。</p> <p>厚木児童相談所…厚木市の担当が決まっておりますので、大切な情報が載っていますので療育手帳を取得する際に手に取れるようにしたい。</p> <p>教育委員会…入学前、就学相談などの時にお渡しできるか。</p> <p>やまびこ会…幼稚園、保育所、小学校、中学校、全体に配布というのは難しいのか。自分の子どもが障がいの有無にかかわらず、この情報を知る機会となる。育児にいっぱいいっぱいになっている人が、友人から聞いて助かったというケースを何件かみてきた。 →障がいの有無に関わらず、その情報を多くの人を知って、困っている人が助かるようにということですね。どのタイミングでどこに、とは言えないが事務局で預からせてもらう。</p> <p>厚木なのはな…相談支援事業所は必ず。放デイや児童発達の職員も必須。事業所として家族と向き合う前にわかっていないとだめですからね。家族にも伝えられるようにしたい。必ず職員はみて支援するようにしたい。</p> <p>社会福祉協議会…地域に繋がって欲しいという視点で、社協としてホームページを見てください、というよりは主任児童委員に配布はしたいと思う。困っている家族がいた際に、情報提供できるツールとして活用していただきたい。民生委員、児童委員というのは2年任期であるが、主任児童委員となると年に3回から4回ほど研修や勉強会などがあり、広く渡せるように協力していきたい。</p> <p>今回意見が挙がったように、各機関からそれぞれ必要なところに届くようにしていただきたい。今年、6月の第1回プロジェクトから、メンバーで検討を重ねてこのサービスマップが出来上がりました。今後もこれを作っただけでなく活用していけるようにしていきたい。引き続きご協力、またご意見等いただければと思う。</p> <p>(2) 医療的ケア児コーディネーターの意見交換、協議について</p> <p>このプロジェクトでも医療的ケアの必要な児の状況、保育園の利用状況などを報告してきたが、市内</p>

にいるコーディネーターの協議の機会を作ることにした。県の委託を受けて、主任コーディネーターとして活動をしているのは、基幹相談支援センターであるが、それ以外に厚木市内にコーディネーターの研修を受けた方が何名かいます。また、市内の相談支援センター8か所でも医療的ケア児の相談を受け始めています。まずは市内のコーディネーターと相談支援センターの連絡会を開催する。これは、厚木市の協議の場としていきたい。切れ目なく医療的ケア児のサービスについて構築していけるようになればと思います、協議の場として2月22日に実施予定。

訪問看護ステーションもみじより

厚木市学校等訪問看護支援事業は、市内の幼稚園、保育所に医療的ケアの必要な児を受け入れているところに訪問をしている事業であるが、直近であった訪問依頼があったケースは、厚木市内在住で伊勢原市内の幼稚園に通うケースであった。厚木市の要綱に基づく、他市の幼稚園は対象外となるが、伊勢原市の要綱であると、他市でも認めるとしている。市町村によって微妙に受けられるサービスが違う。幼稚園を他市にはいけないという決まりはなく、家族が選ぶものであることをこの場で共有しておきたい。

要綱は別として、ステーションで関わりを持った方がよいと判断した。現在の制度について、親御さんにも説明をしたのだが対象外になってしまったから、ステーションに連絡を入れたとのことであった。

対象外になってしまったケースでは、インシュリン投与が必要なのですが、自己投与ができるので必要がない、看護師の支援はいらないと判断されているようだが、できる、できないの判断ではなく、決められた必要量を食事の兼ね合いなどトータル的に考えて投与することは小学校1年生には高度なこと。その医療的部分を学校に持ち込むことになると、親御さんが学校に行くことになる。そうなる本来なら医師とのやりとりも必要になるところだけれど、こういうケースは専門分野のかかわりを入れる優先順位は低いと思われてしまうが、専門的なスタッフが入ることで、学校生活が安全に送れるのであれば逆に優先順位は高いと思う。

厚木市教育委員会より

上記案件について、優先順位が下がったということではなく、自己注射の後に状態が変動するお子さんということもあり、訪問看護は行為をしていただくという機関であって、その母が求めるのはその前後の体調だったり、様子だったり、打った後の管理のところで、その訪問看護にずっといていただくことは出来ないで看護師介助員をつけるのが一番と考えているが、足りていないのが現状。今、次年度在学予定の子どもが出そろったところで、配置を考えている状態。その対象児童には配置をする予定ではあるが、現時点では保護者にまだ伝えられない状況。どの看護師介助員がつくかも決まってない段階である。ただ、保護者の不安ということも含めて、やり取りについては申し訳ないと感じる。→母の動きが早く、自身で動いて手配をしてくださっていたところである。医師との連携など必要なところで対応していく。

厚木市障がい者基幹相談支センターより

医療的ケア児というと非常に幅が広く、一般的に知られているような胃ろうだったり、透析だったり、インシュリンだったり、メディアでもとりあげられて分かりやすいが、そういう児童も就学に繋がっていく。実際はその児童ごとに問題がそれぞれであるから、幼稚園、保育所のうちから、次年度、どこに入る等、情報を共有し、手厚く支援できるような仕組み作りをしていきたい。

(3) 児童発達支援・放課後等デイサービス事業所連絡会について

厚木市障がい福祉課より

12月14日に市内にある児童発達支援、放課後等デイサービスの事業所、34名、市内相談支援事業所9名に参加していただき連絡会を開催した。議題として障害児通所支援等事業所ガイドブックを改訂、基幹相談支援センターで集計している事業所の一覧にもとづいて、それぞれの事業所の紹介、参加した相

談支援事業所からもそれぞれの事業所紹介。その後にグループワークで「相談支援事業所と通所事業所の顔つなぎの機会」とした。また、連絡会の代表を決めさせていただき、プロジェクトメンバーになっていただくようお願いをした。

この連絡会の立ち位置としては、プロジェクトの下に連絡会があり、連絡会で挙げられた意見をプロジェクトで話し合い、プロジェクトの話連絡会にて報告していただく。相互一体となって、組織的に出来るように行った。放課後等デイサービスからの意見として、学校側に求めることがあるのだが、それぞれに抱えていることは、連絡会を通じて整理し、意見をまとめて、質問などを教育現場に伝えていく。

また連絡会の最後に、学校に行くことを選ばない児童の放課後等デイサービスの出席扱いについて、文科省からの通知があるが、どのように厚木市に求めていくかを話し合っていく場とする。

厚木市障がい者基幹相談支センターより

今回の連絡会では、相談支援機関と繋がる場とした。次回3月の連絡会では教育委員会と繋がる機会をということで、厚木市教育委員会より「支援級の仕組み等を伝える機会」とする。教育と放課後等デイサービスの相互理解の場を作っていく。

(4) 次年度の取り組みについて

厚木市障がい者基幹相談支センターより

今年度は3回のプロジェクト会議と3回の連絡会をひらくことができた。マイサポートブックの改訂、サービスマップの作成、周知、医療的ケア児コーディネーターの活動報告などをしてきた。次年度も委員のみなさんと取り組む課題等を話し合えればと思い、開催通知で意見を募った。次年度どのような内容が良いか意見をもらえればと思う。特定非営利活動法人厚木なのはなより「子どもを支援しているご家族や親の支援が必要なのでは」と意見をもらった。

特定非営利活動法人厚木なのはなより

療育を必要としている子どもを育てる母が就学後に相談できるところが減り、どこか相談機関とつながっていないと孤立している。情報がもれて埋もれてしまうような家族、障がいをもった子どもを育てる親が安心して子育てができるよう、広く何かできないかと思って意見をあげた。

- ・各委員より次年度に取り組む内容について意見交換を行う。

厚木市障がい者基幹相談支センターより

今の意見から情報が足りていない家族、親にどのように情報を届けるかこのプロジェクトで話し合っていくことも良いかと思う。

やまびこ会（厚木市自閉症児者親の会）より

放課後等デイサービスが増え、日中一時の替わりになったり、親のレスパイトになっていたりする。そういうところで、親の支援をどのようにしていったら良いのか、事業所も含めて考えていきたい。本当に必要な人に届いていない、というところをもう少し何かできないかと思う。

各委員から意見をもらい、次年度は「障がいのある子を抱える家族、親の支援」を中心に具体的な取り組み内容については事務局に持ち帰り、次年度のプロジェクト会議にて決定する。

(その他)

厚木市教育委員会より

次々年度入学予定の就学相談、説明会について、令和6年5月9日 サイエンスホールにて実施予定です。
特定非営利活動法人厚木なのはなより

質問；最近の就学相談、説明の傾向を聞きたい。というのも、身の回りでお子さんに障がいはないけれど支援級に進学を選んだ方や、お子さんの進路先に支援学校を希望するお母さんの話を聞くことが多くあり、この場で聞ければと思った。

厚木市教育委員会より

支援学校については、審議をしながら決定していくので、年度によって人数がそれぞれである。地域の特別支援学級に関しては、今年度措置することになった子どもが非常に増えている傾向にある。親世代における支援級のイメージが、変わってきていることを感じる。神奈川県が出しているインクルーシブ教育、障害があってもなくても同じ環境で教育をうけるといったことから、普通級で教育を受けることができるのではないかと思われるお子さんも支援級を希望するといったケースが出てきている。支援級を希望すると一定時間、支援級で過ごすという国からの伝達があったが、県からもその制限に限らずという説明を受け、厚木市としてはそのような制限はもうけないと教育相談で伝えさせていただいている。ただし、お子さんそれぞれの特徴に合わせ、交流級、個別対応など計画、目標を明確に対応するように教育現場には伝えている。次年度、措置を交流級に変更しようとしているお子さんに関しては、現在全て交流級にしているなどのケースもあるかと思う。それは、国からの説明により、個別に計画に基づいて対応する様、職員にも伝えているということ。

ただ、現在普通級と支援級の間として、リソースルームというものを設けていきたいと考えて整備して、動いているところでもある。増えていく支援級を希望されているお子さんたちのことを考慮して、その整備だったり、支援級のあり方だったり教育現場の課題である。

今年度、829人でスタートしたが、次年度は913人（小・中学校で支援学級を希望する人数）であることから約100人増となる。

座間支援学校より

えびな支援学校、伊勢原支援学校が増えていることはないが、支援学校が行う各学校へ出向く巡回指導でお子さんの様子を見にいっているが、そこで相談されることとして、知的なことというより、情緒面で困っているという親御さん、先生方からの相談は多い。学習ができて心も落ち着かないケースやそのことで悩まれている親御さんも多く、普通級より支援級の方が職員配置もあり、情緒面の対応もしてもらえるとこの思いから支援級を希望する方が多いのではないかな。ただ、逆に親御さんが通常級を希望しているけれど、ご本人の様子から支援級じゃないかな、と思ってもご家庭の意向で通常級に在籍して苦しい思いをしているお子さんもいる。みんながうまく組み立てられて、適したところで在籍できたら良いと感じる。インクルーシブ教育がすすみ、環境も学習もみんながその子らしくいられる状態ができれば良い。

オブザーバー；一般社団法人クロスオーバー大和より

どこも放課後等デイサービスも増え、そこでも困り感があり、困り感を共有するのに時間を割いている場面をよく見聞きする。それぞれの事業所が困り感を共有して、共感して納得して離れるところをみるとそれで良いのかなと思う。そういうのを見ると、関係作りって大切なんだと感じている。

家族支援といってもそれぞれの家庭で、その子が生きていくための生存戦略みたいなものが、それぞれの家庭に温度差はあるけれど思いが強い。その生存戦略というものと各事業所が戦っていたりして。

家族支援といっても世代や思いなどに幅があり、それぞれによって支援や求めるものが違う。それぞれに合わせた支援、支えられたいニーズが変わってきている様に感じる。どのように支援したらしくりくるのか、個別に合わせたものができればと思う。家族支援といっても決まった方向性や形に持っていきがちであるが、全体を包み込むような「ふわっ」と家族としての方向性をとらえて、支援ができればよいのではないかな。家族支援というものの自体がとても奥が深く、時間を積み上げていくものであるか

ら、このプロジェクトに参加しているそれぞれが家族支援をわかる、理解するということから、方向性を生み出すことが大切だと思う。

以 上

3 閉会